



よしだつうしん

吉田通信

第30号
【2017年3月】

〒950-1475 新潟県新潟市南区戸頭1347-1 TEL:025-372-1138 FAX:025-372-1155

■この吉田通信は私とご縁のあった方、ご縁をいただきたい方に差し上げている月一個人通信です■

◆東日本大震災から6年、7回忌を迎えました◆

こんにちは。吉運堂の吉田竹史です。吉田通信第30号をお送りいたします。

亡くなられたすべての方々のご冥福をお祈りし、また一日も早い復興をお祈り申し上げます。

さて、前回の吉田通信では、Amazonのダッシュボタンについて書かせていただきました。そのボタンをひとつ押すだけで、水や洗剤などの注文が確定し、最短でその日に届いてしまう画期的なサービスです。このように世の中がどんどん便利になっていくことは好ましいことです。

ただ、より便利にという時代の流れがあるからと言って、墓離れ、仏壇離れ、宗教離れを見逃してしまわないようにと…。仕事柄でもあります。日本人の一人として普段からそう思い、たまたまラジオで東日本大震災の特集番組に出演されていた芥川賞作家であり僧侶でもある玄侑宗久（げんゆう そうきゅう）さんのお話を聞いて、ご本人のインタビュー記事のことを思い出しました。2014年8月24日「新潟日報」でのインタビュー記事です。一部抜粋いたします。

風化は自然現象。悲しみから癒えるのも、ある意味で風化するからで、風化に助けられてもいる。でも一方で忘れられたくないという気持ちもある。忘れたいけど、忘れられないという気持ちを両方満足させる方法として日本人は仏壇を作った。毎朝、仏壇に手を合わせ、線香をあげる。その時に集中的に思って、あとは忘れて会社に行ける。

年忌法要というシステムも同じ趣旨だ。集中的に49日間喪に服するのは忙しくてできないとあきらめ、その代わりに先延ばしをする。三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌から五十回忌まで。決まった年忌の時にきっちり儀式をすることによって、忘れながら忘れていないという在り方を実現した。



私たちは、こういったことを啓蒙できる立場にあります。人によっては「それは、買ってもらいたいからでしょ」と捉えられてしまうこともあると思いますが、それでも、昔からある日本の大切な文化が消えてしまわないように、私たちはこれからも伝え続けていきたいと思っています。

◆発行者コラム◆

今回も最後までお読みいただき、どうも有り難うございました。さて、3月の始めに会社として遅めの新年会を行いました。去年は店長だけだったのですが、今回は山形や仙台からも基本的に全社員を集めての宴会です。当然、お店を休みにするわけにはいかないの、全員参加ではないのですが、全体で集まってコミュニケーションを取ることができたのは、とても良かったです。また来年も実施したいと思います（笑）。吉田竹史

■吉田通信を今後ご希望されない方は、大変お手数ですが090-3339-0424までご連絡をお願いいたします。■

【発行者プロフィール】

名前：吉田 竹史（よしだ たけし）
生年月日：昭和40年8月21日（O型）
出身地：新潟県白根市（現・新潟市南区）
経歴：都内の学校を卒業後、証券会社（水戸 & ニューヨーク）の4年間の勤務を経て吉運堂へ。

趣味：上手くないゴルフ、強くない将棋
（NHKの将棋対局を見ることは好きです）
家族構成：妻、娘、息子



吉田 竹史